

名古屋駅から電車で約30分の旧国鉄中央(西)線の廃線跡に残された、全13基のトンネルからなる産業遺産である愛岐トンネル群。その中の3号~6号(定光寺駅~県境)の4つのトンネル空間を使った、クラシック音楽のサイトスペシフィック・アート。外部から隔絶された空気の温度、匂い、漆黒の暗闇、洞窟のような音響空間4つにそれぞれテーマを設定。観客はトンネルを移動しつつ、最初に打楽器、次に合唱、3番目に器楽の生演奏、ラストは生のソプラノ声楽、そして、特別に設計されたサウンドシステム用いての交響曲たちが再生されていく。音楽の発生からその進化、人間との関わりに意識が向かっていくような“場”を、暗闇を感じる視覚、それによって研ぎ澄まされる聴覚と五感の変化を体験していく試み。

Aigi tunnels, an industrial heritage consisted of 13 tunnels, left on the ruins of the former JNR Chuo West Line. This is a Site-specific art of classical music using four tunnel spaces from No. 3 to No. 6 (Jokoji Station to prefectural border). The project set themes to four acoustic spaces each, the temperature, smell, jet-black darkness, and cave that are isolated from the outside. As moves through the tunnel, audience would encounter first the percussion instrument, then the chorus, the third instrumental live performance, the last is the live soprano vocal music. And the symphony was on-air using the sound system acoustic which is specially designed. This is an attempt to experience changes in the sense of darkness and the sharpened sense of hearing and the five senses through a “place” where consciousness goes out from the generation of music to its evolution and human relations.



“Aigi Tunnels” are an industrial heritage consisting of a total of 13 tunnels left on the ruins of the JNR Chuo West Line between Nagoya and Tajimi. They were used from 1900 to 1966 and now are left in an area of about 8 km along the Shonagaawa-river. These tunnels that have been abandoned more than 40 years. Currently, a Committee of Kasugai Citizen and Aigi Tunnels Conservation and Regeneration Committee (currently a non-profit organization) work on discovery and maintenance. The tunnels between No. 3 and No. 6 (Jokoji Station-prefectural border) has improved enough to open to the public in spring and autumn. The Tajimi branch was newly established in the committee and they prepares for redevelopment of the No. 7-14 tunnel.

1900(明治33)年から、1966年まで利用されていた、名古屋~多治見間を結ぶ国鉄中央(西)線の廃線跡に残された全13基のトンネルからなる産業遺産。庄内川沿いの約8キロに及ぶ地域に残されている。40年以上放置されていたが、春日井市の市民団体、愛岐トンネル群保存再生委員会(現在はNPO法人)が、このトンネル群を掘り起こし整備し続けている。

その土地や場所が持つ温度、空気感、匂い、土地の記憶など地場の魅力を全身で感じながら、5感プラスアルファでクラシック音楽を「聴く」音楽環境体験を、湯山玲子(サウンドアーティスト)+石黒謙(サウンドシステム/ACOUSTIC REVIVE)が創り出すサウンドアートプロジェクト。クラシック音楽をコンサート会場から脱出させ、自然や建築物などの「環境」の中で、温度や匂い、風やうつろう自然光の中で聴く=体感するというものである。

2018年12月1日には、『水島臨海工業地帯の工場夜景と瀬戸内海のサンセットを体感する船の音楽会』を岡山県倉敷市児島にて開催。定員70名の遊覧船の中にサウンドシステムを持ち込み、クラシック音楽の数々と移りゆく船上からの光景、船上で感じる振動からなる時間芸術を実施した。70人キャバの遊覧船をチャーターして、サウンドシステムを搭載し、第1便がサンセット時の瀬戸内海に、第2便が水島臨海工業地帯の工場夜景とともに漆黒の闇の中を船出した。

2019年5月3日、4日には、『彫刻家のアトリエの中で、ステレオサウンドを聴く ~ストラヴィンスキーとか、人の声とか』

を東京谷中にある日本における近代彫刻の雄、故・平樹田中邸の当時の豊かで創造性のある建築空間であるガラス張りのアトリエに展開。クラシック音楽の新しい音響と機会を創出。1970年後半、CD前夜に日本の家電メーカーがその技術の総力を挙げて作った 家庭用オーディオシステムを持ち込み、ストラヴィンスキーを始めとしたレコード録音物を聴く。「音楽は、人がわざわざ聴くものだった」時代の時間と空間を作り出すという、サイトスペシフィック・アートの試みであった。

Baku-cla earth diver is a sound art project by YUYAMA Reiko (Sound Artist) + ISHIGURO Ken (Sound System / ACOUSTIC REVIVE), that creating experience of classical music through five senses and more, while feeling the charm of the local area, such as temperature, air feeling, smell, memory of the land This is a sound art project that creates a music environment experience. Escape classical music from the concert venue and listen to it in the “environment” of nature, buildings, etc. in the natural light of temperature, smell, wind and changing lights = “feel”.

On December 1st, 2018, we held a “Ship Concert to Experience the Factory Night View of the Mizushima Seaside-Industrial Area and the Seto-Inland Sea” in Kojima, Kurashiki-city, Okayama. The sound system was brought into a sightseeing boat with a capacity of 70 people, and a time art consisting of classic music, moving scenes from the ship, and vibrations felt on the ship was carried out.

On May 3rd and 4th 2019, “Hear the stereo sound in the sculptor’s atelier-Stravinsky, the voice of a person,” the man of modern sculpture in Japan in Yanaka, Tokyo Conducted at Hiragushi Denchu’s House. A new sound and opportunity for classical music were created in a glass-walled atelier, a rich and creative architectural space of the time.

## I at 3号トンネル

「打楽器と声の闇」

最初の3号トンネルで演奏されるのは、打楽器とヴォイス。人間が道具を使うようになったそのときから、「モノを叩いて音を出す」という行為は始まり、それはすぐにコミュニケーションの方法となり、リズムでもって人々の一体感を引き起こし、遊びや快楽をもたらす「音楽の事始め」となった。暗闇に打楽器のビートとヴォイスが轟くとき、観客の心は鍾乳洞に垂れさがる石灰のつららを叩いたクロマニヨン人と同じなのだ。

Percussion instruments are played in the first tunnel No. 3. From the moment humans began to use tools, the act of “sounding things and making sounds” began, which immediately became a method of communication, causing people to feel unity with rhythm, bringing play and pleasure It became “beginning of music”. When the percussion beat beats in the dark, the audience’s heart is the same as the Cro-Magnon who hit the lime icicles hanging in the limestone cave.

## II at 4号トンネル

「合唱の闇」

次の4号トンネルに流れるのは合唱。キリスト教の布教に大きく貢献したのは、教会で歌われる賛美歌であった。それは声を通じて、神に近づく信仰の方法であり、教会空間いかに声を美しく響かせる発声法は、のちに大劇場を轟かせるベルカント唱法に繋がっていった。ここでは12人の女声アンサンブルの響きを暗闇の中で堪能する。

The chorus will be heard in the next tunnel. It was the hymns sung in the church that greatly contributed to the Christian mission. It was a way of faith that to be closed to God through voice, and the utterance method that echoed the voice beautifully in the church space led to the Bel Canto chanting method that later made the Grand Theater appear. Here you can enjoy the sound of a female ensemble of 10 voices in the dark.

## III at 5号トンネル

「フルートとギターの闇」

その次の5号トンネルの中で演奏されるのは、フルートとクラシックギターという、ふたつの器楽。草笛の原理からも分かるように、楽器の事始めのような存在のフルート、そしてギターは、洞窟を住み家とした流浪の民ローマの魂の楽器。ヒューマニティ溢れるふたつの楽器の響きは、孤独から脱して、集団をつくる人間の本性と笛と弦という器楽の必然を浮き彫りにするだろう。

The next No. 5 tunnel will be played with two instruments: flute and classical guitar. As you can see from the name of the grass flute, the flute is like the beginning of a musical instrument, and the guitar is a musical instrument of the soul of the gypsy folk who lived in a cellar. The sound of two instruments with full of humanity will highlight the human nature of creating a group out of loneliness and the inevitability of instrumental music such as whistle and strings.

## IV at 6号トンネル

「声楽、交響曲と管弦楽の闇」

そして、最後の6号トンネルの暗闇の中で最初に立ち現れるのは、ソプラノ。「人の声というよりも自然現象」のようなソプラノ発声は、トンネルの空間に異界を出現させるだろう。そして、コンサートホールではなく、深い暗闇の中に流れるオーケストラサウンドの音響体験は、まさに、アナザーワールドとの交信。蒸気機関車のノイズを音楽に取り入れた、オネゲルの交響的断章(運動)第1番『パシフィック231』は、ここを通過していた鉄道オマージュを通して、土地の記憶を呼び起こす。シベリウス『交響曲第7番』の幽玄、日光陽明門とエカテリナパルクが頭から落ちてくるようなサン・サーンズ『交響曲第三番(オルガン付き)』の豪奢、冷たい熱量と死の予感に満ちているマラー『交響曲第9番』などが再生予定。それらの音楽は、時空を越え、観客の心を深い精神性の領域にまで誘っていくだろう。

Soprano first appears in the darkness of the 6th tunnel. Soprano utterances as if “a natural phenomenon rather than a human voice,” will cause a different world to appear in the tunnel space. And the acoustic experience of the orchestra sound that flows in the darkness, not the concert hall, is exactly the communication with the other world. Honegger’s Movement Symphonic No. 1 “Pacific 231”, incorporating the noise of steam locomotives into music, evokes the memory of the land through a tribute to the railroad that passed through the space. Sibelius’s Symphony No. 7, Saint-Saëns’ Symphony No. 3, the fascination with the organ fell from the head of Nijo Yomeimon and Ekaterina Park full of cold cheerfulness and death, Mahler’s “Symphony No. 9” will be played. These music transcend space and time and invite the audience’s heart into a deep spiritual realm.



白井剛史/プリミ駝部  
(ボイス&  
身体パフォーマンス)

プリミ駝部名義の音源として「シュベルヴェリエル」「プリミ駝部な世界サウンドトラック」「UFOPIA」を自身が主宰するレーベル「Whiteholerecords」よりリリース。「愛(味)を満ちる生き方」(青林堂)「地球の新しい愛し方」(青林堂)など著作多数。宇宙マッザージをする。



池上英樹/  
(打楽器・マリンバ・  
パフォーマンス)

第46回ミュンヘン国際音楽コンクール打楽器部門で最上位入賞。ババ国立高等音楽院などで自身を主宰するレーベル「Whiteholerecords」よりリリース。「愛(味)を満ちる生き方」(青林堂)「地球の新しい愛し方」(青林堂)など著作多数。近年は作曲、編曲活動に加え、フランメンコダンサーとしても邁進。



### 名古屋芸大・女声アンサンブルMarimo座 (女声アンサンブル)

名古屋芸大の声楽家たちで構成され、ソロ活動に加え女声アンサンブルとしても精力的に活動。2011年第1回目のコンサート(電機文化会館)が好評を博す。レパトリーはミサ等の宗教曲からオペラ・オペレッタ・邦人作品の合唱曲まで幅広い。今夏はイタリア・ヴァチカン市国より招待される。現在、主宰馬場浩子とメンバー13名。専属ヒューストラー。



泉真由  
(フルート)

第13回日本フルートコンヴェンションコンクールロ部門第1位。吉田雅夫賞。他多数受賞。これまでに2枚のCDをリリース。2019年より琉球フィルハーモニックオーケストラ楽首席フルート奏者に就任。朝明学園大学、洗足学園音楽大学で非常勤講師を務める。



松田弦  
(ギター)

第52回東京国際ギターコンクール第1位をはじめ、2000年~2013年のあいだに国内外8つのコンクールで第1位受賞。2013年、CD「弦想~Gen-Soul」でキングレコードからメジャーデビューし、2014年、CD「esperanza」発売。2017年、フォンテックより「everGrEen」発売。



### 林正子(ソプラノ/Soprano)

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了。二期会オペラスタジオ修了。2001年五島記念文化ホール新人賞受賞。【コシ・ファン・トゥッパ】フィオールドリッジ、【椿姫】ヴィオレッタなどのオペラ出演のかわら、東京都交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、新星日本交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団などの交響曲やレクイエムのソロistをつとめる。1998年、スイス・ロマンダ管のドイツレクイエム以後、オーストリアの音楽祭にて、ナポリ、テアトロ、サンカルロのヴェルディレクイエムをはじめとして、ヨーロッパでのコンサート活動を始める。02年1月新国立劇場二期会共催【聖貞観】お聴、同年7・8月二期会公演【ユルシベルクのマイスタージンガー】エーファで出演。03年2月二期会公演【カルメン】ミカエラで出演。現在、ジュネーブ音楽院在学中。



湯山玲子  
(サウンドアーティスト)

著述家、プロデューサー。現場主義をモットーに、クラブカルチャー、映画、音楽、食、ファッション等、博覧強記にセンスが加わった独特の視点にはファンが多い。NHK「ごごナマ」、MXテレビ「ばらいろダンディー」レギュラーなどにコメントターとして出演。著作に「女ひとり勇司(幻冬舎文庫)」、「クラブカルチャー」(毎日新聞出版局)、「四十路越え!」(角川文庫)、「文化系女子という生き方」(大和書房)、「男をこじらせる前に」(角川書店)等。日本大学芸術学部文芸学科非常勤講師。(南)水戸71取締局。クラシック音楽の新しい聴き方を提案する「響クラ」主宰。父は作曲家の湯山昭。



石黒謙  
(サウンドシステム/  
アコースティックリバイブ)

日本が誇るオーディオケーブル・アクセサリメーカー、ACOUSTIC REVIVE代表。その製品は世界各国で高い評価を受けており、フランスの音楽誌diapasonにおいて三度の金賞に輝く。アジア各国で「音神」と呼ばれ、独自の音質向上術により世界最大のオーディオイベントであるドイツミュンヘンハイエンドショーにおいて関与したブースは450社中最も音のいいブースに与えられるベストサウンドアワードに3年連続で輝いた。音質調整技術はオーディオに留まらず、大手レコードメーカーのスタジオやライブハウスの音質調整など多岐に渡る。